
巨大浮遊城《アインクラッド》全100層攻略剣語

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイंकランド

巨大浮遊城全100層攻略剣語

【Nコード】

N2723Y

【作者名】

ライガ

【あらすじ】

雨宮 遼太郎／ベルゼは鮮紅色の燐光が夜の森を照らす中、脱力感に侵され、うなだれていた。握った剣は粉々に碎かれ、やがて無数のポリゴンとなって空気に舞う。淡く美しいその様子を意に介さず、彼は立ち上がる。臃げな足取りが向かう先では、見るからに華奢な肩先を露出させ、裸の上半身を服で隠し、力無く座り込む久崎 日菜乃／ヒナノが今にも泣き出しそうな、潤んだ瞳を彼へと向けていた。疲れきった様子の彼は、それでも彼女の手を取り、立ち上がる。

『……逃げよう。この世界を生き残るために……』

鮮紅色の燐光が二人を包む中、彼らの世界は外界より切り離される。

——護らなければ。彼女と、共に掌を取り合って。

Episode of Prologue

『……ああああ……』

遠ざかるように重なった悲鳴がこだまする。巨大な樹木が根を下ろす場所で、その声はやがて吹き付ける風が鳴らす葉音に吞まれていった。

悲鳴と同時に散乱した鮮紅色の燐光が夜の森に淡く漂う。月の光と相まって輝くその風景は見惚れる程の幻想的な美しさを含んでいた。咲き誇る美しい景観の花弁が風と共に散り乱れていくように、儚さ故の、すぐさま霧消するが故の美しさ。燐光はその存在感を希薄にしていき、ゆっくりと夜の闇に溶けていった。残った光源である月光が、その場でうずくまる二人の少年と少女を優しく照らす。

少年はまさしく顔面蒼白だった。青白い表情は月の光と重なり合い、どうしようもなく病弱な印象を受ける。力無く座り込み、根本からへし折れた剣、ただ一点を凝視している構図は、さながら精神障害者にも見える。

だが、この世界で病弱ということはあるえない（……）。加えて言うならば、彼は精神障害者の類いでもない。それどころか、彼の一点を凝視する瞳には並々ならぬ意思の炎が燃えたぎっている。

まるで、過酷な旅路を決意するような、何物にも揺らがぬ炎が彼の瞳には宿っていた。

彼の視線の先には、その一点を凝視する、という言葉通りに空中に浮かぶ『点』がある程度の文字と共に枠に囲まれて存在していた。先程までは、この世界で無害を表すライトグリーンが輝いていた。

だが。鮮紅色の燐光が完全に消え去った時には——その色は、鮮紅色に当てられたようなオレンジ（・・・）へと成り果ててしまっていた。

オレンジカラー。それは、この世界で犯罪者を意味する色。

もちろん、少年の知らないところで突然変色した訳ではない。犯罪者になることを覚悟して、犯罪という自覚があるにも関わらず罪を犯したのだ。むしろ、自分のしでかした行為を鑑みれば、犯罪者で済んだことに喜ぶべきかもしれない。

そう。

鮮やかな紅色の光が表すのは——現実世界の鮮血。

量からして、三人分といったところか。

この世界の死Ⅱ現実世界の死、という方程式を知らながら……彼は三人のプレイヤーをその手に掛けたのだ。だが、言葉にするよりも相当激しい戦いだったらしい。へし折れ、青い光となって消えゆく彼の剣が、いかに壮絶な戦闘だったかを物語っている。

誤解のないように言うならば、その少年は決して殺人を犯すような反社会性の人格の持ち主ではない。多少尖った部分はあるものの、殺人に至るような思考の持ち主ではない。

それならば、なぜ。至って普通の少年である彼がなぜ殺人という大罪を、それも三人の人間を屠ったのか。

その答えは、彼に視線を注ぐ少女にあった。

立ち上がる少年に潤んだ視線を向ける少女。乱れたスカートを直そうともせず、白磁のような美しい素肌を隠すように、自分の着ていたであろう衣服で裸にされた上半身にあてがうその表情からは、先程まで自分に襲い掛かっていた悪意への恐怖、彼とこの場で会えた安堵、そして、彼に助けられることを望んだ後悔と罪の意識が渦を巻いていた。

「りよ、遼太郎くん……」

「いいんだ」

鈴の音を彷彿とさせるような澄み渡る声で少年の名を呼ぶ少女。だが、彼女の声は彼の異論を許さない言葉で遮られた。この世界で本名を口にするのはタブーだが、そのことに憤った訳ではない。それどころか、思わず口をつぐんでしまいながらも、彼の声色には溢れる優しさが感じられた。

「……いいんだ」

繰り返される言葉。二回目のその言葉は、もしかすると自分に向けた言葉かもしれない。この世界を犯罪者として生きる道を選んだ自分を、奮い立たせるように叱咤しているのかもしれない。彼女も敏感にその思考を読み取ったのか、未だ目線を彼へと向けながら、とうとう大粒の涙が潤んだ瞳からせきを切ったように流れだした。

少年はその様子を黙って、目を閉じて彼女の悲しみを感じていた。やがて彼の手が自分の羽織っていた白銀のコートへ伸び、コートが彼の身体から消える。かと思いきや、すぐに少年の手にさっきのコートが出現し、俯いて泣き続ける少女を優しく包んだ。

顔を上げた少女に、少年は手を差し延べ、諭すように言葉をかける。

「……逃げよう。この世界を生き残るために……」

デスゲーム《ソードアート・オンライン》。約一万人が囚われた

その舞台、巨大浮遊城。アインクラッド 今日も現実の世界へ還るために、死神の手
の上でプレイヤーが踊る中――

この日、協力という名の調和が保たれた世界から、二人のプレイ
ヤーが切り離された。その先に、壮絶な苦難が待ち受けると見極め
ていながら。

二人は、世界との関わりを――断ち切った。

E p i s o d e o f P r o l o g u e (後書き)

一話だけ投稿……みなさんの反応で更新したいと思います。褒められないと伸びない子なので……。

感想お待ちしております。

01 Episode

「ちげーっての。もっとこう……あれだ。剣を振る感じ？」

「……遼太郎くんは、先生とかには向いてないかもだねえ」

始まりの街。その郊外にある広い草原のようなフィールドに、その二人は揃って革の服を着用し、剣を振り回していた。いや、正しく言うところの方だけが慣れない武器を渡され、遼太郎と呼ばれた少年にレクチャーされているようだ。

「だから、本名で呼ぶなって。ちゃんとベルゼって呼べ、ベルゼって」

『ベルゼ』。この世界に飛び込む際、少年が自分につけたプレイヤーネームだ。

MORPGをプレイする時、自分の本名を名付けるようなことは暗黙の了解なのである。自分で自分の名前を決めることができるのもMORPGの醍醐味と言ってもいいだろう。自分ではない、しかし架空のキャラクターを自作し、操ることはこの上なく楽しいものだ。遼太郎——ベルゼも、そのことを充分に理解している程、

ネットの世界を渡ってきた……言わば重度のネットゲーマーである。

「だってさあ……私はいつも通りなのに、遼太郎くんだけ違う名前
で呼ぶなんて、変な感じ。ちゅーかずるいつ」

「あのなあ……だから本名はやめとけって言ったんじゃない。あとベ
ルゼね」

「え。一言もそんなこと言われた記憶がないよ!？」

そうだったけ？ と首を捻るベルゼ。話を聞く限り、どうやら二人
はリア友——リアルでの友人同士という意味——のようだ。

「ああ……とうとうヒナノも更年期障害の餌食になったか。介護保
険はちゃんと取るんだぞ？」

「まだぴちぴちの14歳だよっ。全く失礼なやつちゃん、遼太郎く
んは」

「ベ・ル・ゼ」

ぬぬう……と、ヒナノと呼ばれた少女が頭を抱える。そうされる

とただでさえ平均より低めの身長がさらに小さく見える。小動物のような印象を受ける少女だった。

「ほら、それよりさっさとあのイノシシ倒しちゃえよ。冗談抜きで日が暮れるぞ」

少年が剣で示す方向には、言葉通り青いイノシシが鼻息荒くこちらを睨みつけていた。何の変哲もない、言わば雑魚モンスターなのだが、その雑魚モンスターに苦戦してるプレイヤーも中にはいるのだ。まさにヒナノがいい例だろう。

「同じ片手剣なんだ。言っただメなら見て覚え、ってな。俺の動き見て、その真似してみろ。オーケー？」

「ノーサンキュー！」

「……ケンカ売ってらっしゃる？」

「おつけーだよ遼た、」

「ベ・ル・ゼ」

「はいはい。ほじゃ、お手本お願いします、ベルゼ先生？」

やれやれ、といわんばかりにため息をつくベルゼに、その背中を

叩きまくるヒナノ。なんだかんだ言いながらも相性の方は問題ないらしい。すでに自分達から注意を逸らした青イノシシの方へ一步進み出たベルゼは、右手に握る安物感溢れる剣を軽く横殴りに払う。それだけで剣は薄水色のライトエフェクトに包まれ、シャンツ！という甲高い音を産んで空気を切り裂いた。単発水平斬撃技。ホリゾンタル

ベルゼが繰り出した、この世界を形作る剣技——《ソードスキル》は青イノシシを直撃することなく空振りに終わる。だが、全くの無意味という訳ではなかったようだ。ソードスキルの発動を感知した青イノシシがこちらに視線を向け、いつでも突進攻撃ができるように前足を忙しく動かしている。先程の攻撃は青イノシシのターゲットを取るためだったらしい。

「いくぞ。しっかり見とけよ？」

しかし、その光景を目にしてもベルゼが慌てることはなかった。それどころか、後ろで待機しているヒナノの方へ振り向き、彼女の様子を見ている。それもそうだろう。現実世界では自分にとって脅威であろうと、この仮想世界では目の前の青イノシシは雑魚に等しいモンスターだ。怖がれという方が無茶な難題なのである。

果たして、ベルゼの態度が気に入らなかったのか、痺れを切らして青イノシシが突進攻撃を繰り出してきた。まさに猪突猛進という言葉を思い浮かべせるような勢いで走り寄る青イノシシを見ても、ベルゼは剣を構えることもせずその場で立ち尽くしている。が、やがて直撃のギリギリまで青イノシシを引き付けた時——小さく横に跳んだ。

「よっ」

気のない言葉と共に横を通り過ぎる青イノシシに、降ろしたままの剣を弾くように斬り上げる。闇雲に振ったかと思われたその剣閃は、先程と同じように薄水色に包まれる。マニユアルをなぞるように繰り出された剣閃をシステムが感知し、速度や威力をアシストする。垂直斬り上げ技。レイザー

ベルゼの放ったソードスキルは、彼の脇を駆け抜けようとしていた青イノシシの胴体に見事命中した。突進中にサイドから衝撃を加えられた青イノシシが、バランスを崩したように身体を傾かせ、一気に減速する。

「ヒナノ！」

「う、うん！」

口を開けてその一部始終を呆けるように見ていたヒナノが名前を呼ばれ、我に返ったように剣を握り、未だ体勢を崩している青イノシシに向かって走り――

「ほりぞんたるっ！」

今日初めて成功させたソードスキルを、狂いなく青イノシシの弱点である首へと叩き込んだ。致命的な攻撃を受けた青イノシシはぷぎーと情けない鳴き声をあげ、無数のポリゴン片となって消え去った。

「おおおー！ やたー！」

「……や、別に技名は言わなくていいんだぞ？」

ジト目でツツコミを入れるベルゼだが、ヒナノはまるで聞こえていないように喜びはしゃいでいる。その気持ちはわからなくもないのか、それ以上ベルゼが口を挟むことはなかった。彼がヒナノの喜びを理解することができるのは、彼女よりも一ヶ月近く前に自分も同じ体験をしたからだった。

まあ、今はその話は置いておくでしょう。とりあえずベルゼが今やるべきことは――

「ベルゼくんこれ楽しいねっ！ ちょっとクセになりそうかも……ね、ちょっと攻撃していい？」

「のめり込み過ぎですからあ――！！！」

片手に持つ剣をうっとりとした目で見つめる幼なじみを現実引

き戻すことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2723y/>

巨大浮遊城《アインクラッド》全100層攻略剣語

2011年11月7日09時10分発行